

---

# 気分屋魔術師 [幼少期編]

及川

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気分屋魔術師 「幼少期編」

### 【コード】

N0290Z

### 【作者名】

及川

### 【あらすじ】

この世界には魔法が存在する。

## 0話 11の世界について（前書き）

レイアウト等、投稿してから気付く事も多いと思うので、手直しは多く入ると思います。

不定期更新で、のんびりやっていければいいなと考えています。

## 0話 この世界について

この世界には「人族」「エルフ族」そして、「精霊」と「魔物」が存在します。

まずは人とエルフ。

人とエルフは生活領土が分かれており、どちらも王政をとっています。

もちろん移住などは可能です。

二種族の違いは、見た目の違いくらいでしょうか。

エルフの方が少し耳が尖っているのが特徴でしょう。

言語、通貨などは統一されており、不便はありません。

次に精霊。

精霊は、いたるところに存在しますが、目には映りません。

世界の概念となっていていとも言いましようか。

手で触れたり、干渉することができない。それが精霊。

人とエルフの中には、精霊と交感することができます。

そのような者たちは多く居ません。ほんの一部です。

その一部の者達は精霊に呼びかけることで、魔法を扱うことができます。

魔法の威力、効果などは扱う人により異なります。

人よりもエルフの方が精霊との交感を得意とする者が多くいます。

フォローを入れると、人はエルフよりも剣の扱いに長けている者が多いです。

最後に魔物。

魔物は様々な動物のことを指します。

おとなしい魔物、凶暴な魔物、すべて包めて「魔物」です。

人やエルフは生きるために狩りをします。  
そんなとき、どんなにおとなしい動物でも抵抗することでしょう。  
なので、一括り。

簡単にはありますが、これがこの世界の常識。

## 0話 この世界について（後書き）

読んでいただきありがとうございます。  
感想等、お待ちしております。

## 1話 0歳 生まれた時から特別な

「この子を、頼みますね」  
声が響いてきた。

それは、僕が生まれる直前のこと。

両親の声でも、産婆の声でもない。

初めて聞く声だったが、それはとても心地よく、  
意味も理解できる不思議なものだった。

次に僕の両親の声

「母さん、よく頑張った！ハハツ、可愛い男の子だ！」

父は興奮した様子で、母はホッとした表情をしていた。

「ん！？母さん！アリアの手の甲に何かが…これは…痣？」

「はあ…はあ…アリア…良い名前ね…大丈夫よアナタ…その子はきつと…精霊様の祝福を…受けたんだわ…」

「精霊の祝福？それは…？」

父は続きを待った。

「声がね…聞こえたのよ…」

「声？」

「そう、声…アリアに何かを、頼んでみたいね…」

「精霊が！？…。さすがは私たちの子つてところか。将来が楽しみだな、母さん」

「もう、アナタったら」

二人は暖かな表情で、元気に泣くアリアを見つめるのだった。

2話 5歳 日常と秘密と幼馴染(前書き)

幼少期編はどんどん年齢を重ねていきます。

いきなり飛ぶので、サブタイトルで年齢を確認しながらの方がいいかと思えます。



## 2話 5歳 日常と秘密と幼馴染

意識を集中する。

自分が作り出したいモノ、やりたいことを明確に、イメージする。そして、自身の中にある「力」を少しだけ開放する。

「加速」

言葉にするのは、イメージを固定化し易いから。

慣れれば必要無いもので、すでにその域まで達しているのだが、鍛錬中なので基本的に忠実にしている。

風を纏ったアリアは、自宅の広い庭を駆け巡る。

庭には多数の障害物を設置してあるが、今ではもう、あつて無いようなモノとなっていた。

アリアは今、日課となっている鍛錬を行っている。

魔法を行使する練習、制御する練習、そしてこれは体力作りにもなっていた。

魔法を使うのには精神力と体力も必要となっている。

すべてをカバーできる、良い鍛錬方法だった。

持続魔法を使っているので、常に疲れが溜まっていくはずだが、10分たつてもアリアは涼しい顔をしている。

急停止、急加速、サイドステップなど動きに変化をつけ、さらに10分。

さすがに疲れを感じて、アリアは止まった。

「だいぶ動きは良くなったな。得意な系統魔法だから上達も早いのかな？」

ニツと笑いながら男が近づいてくる。

「父さん、これでも僕、体力作りをちゃんと、やってるんだからね！」

男：アリアの父に向かい、ちょっと拗ねた様子でアリアは言った。

「ハハッ、わかっているよ。毎日欠かさず鍛錬しているものな。偉

いなアリアは」

ガシガシと髪を撫でられる。

「ちよつ、痛いって！髪が抜けるー！」

涙目になりながら父の手から逃げ出す。

「悪かった、悪かった。さて、そろそろ朝飯の時間だ。汗を流して来なさい」

うう…わかった。と答えて、シャワーを浴びに向かう。

「アリア、風魔法は他よりもだいぶ上達したと思うが、次は何の練習をするんだ？」

食卓を囲みながら、父さんが聞いてきた。

「ん、僕、もつと風魔法がうまくなりたい！風がとても気持ちいいし！楽しいし！」

「そうなの、アリアちゃんは風魔法が好きなのね。ふふつ、頑張りなさい」

母さんがにこやかに話しかける。

「うん！僕、父さん母さんみたいな魔術師になりたいから頑張る！」

「あらあら。アリアちゃんなら、私たちなんかすぐに追い越せるわよ」

「自分の子供に負けたくは無いが…。うむ、アリアは頑張り屋だし、きつとすごい魔術師になるだろうな」

自慢の息子を持った。と二人は喜ぶのだった。

夕方近く、食後のお昼寝をしていたアリアは目を覚まし、起きてくる。

そこで、アリアが起きるのを待っていたのか母さんが

「アリアちゃん、これからお買い物に行くけど、行く？」

と聞いてきた。

もちろん答えは、

「行く！」

「それじゃ、いつもの手袋をしてきてね」

「うん！」

家の外に出るときはいつも手袋をする。

生まれた時は痣のようだったソレは、今では紋章のような形に見える。

そしてこの紋章は、あまり人に見せないようにと言われていた。

昔からなので、とくに疑問も持たず素直に従うアリア。

家から20分弱歩くと、（アリアを連れての移動のため少し時間がかかる）

それなりに大きい町に着いた。

「まずは、パンを買いにいきましょうか」

手を繋ぐアリアに声をかけ、いつも行くパン屋に向かう。

カランカラン

「いらつしゃーい。あら、こんにちは。今日はアリア君も一緒なんですね」

この人はパン屋の店長。

「こんにちはー」

挨拶を済ませ、店内の隅にある椅子に座り、母さんの買い物が終わるのを待つ。

話が長くなるのはいつものことだ。

外で遊んでこようかなーと考えていると、

「あ、アリア君！こ、こんにちは！」

と、部屋の奥から挨拶をされた。

声のした方を向くと、同じ年くらいの女の子が立っていた。

「こんにちは、セリナちゃん。母さんの買い物、もう少し時間がかりそうなんだ。ちょっと遊ばない？」  
と、提案する。

「うん！今日は何を見せてくれるの！？」  
駆け足で近づいてくるセリナ。

セリナはアリアが魔法を使うことができるを知っている数少ない人間だ。

以前、泣いていたセリナをなだめるために魔法を使ったことがある。珍しさからか、それとも不思議なものを感じたのか、それ以来、アリアに懐いている。

魔法のことは、他の人に言わないようにお願いしてあるし、セリナは約束を守るいい子でもあったので、二人の秘密ということ  
で、

たまに魔法を見せていたりする。

「んー…あ、そうだ。できるかわかんないけど…外に行こう！」  
良いアイデアが浮かび、テンションの上がるアリア。

「母さん！セリナちゃんとちょっと外行ってくるね！」

「あまり遠くに行っちゃダメよ？気を付けてね」

「うん！」

セリナちゃんと店の裏側に来て、辺りに人がいないことを確認する。  
そして、

「それじゃ、始めるよ」

アリアが声をかけ、セリナはワクワクした様子で何が起るのか見  
ている。

両手を受け皿みたいな形にして、魔法を使ったため集中するアリア、  
内にある力を開放し、魔法を発動させる。

言葉を発しないのは、女の子の前ということ、恰好をつけたいか  
ら。

これから使う魔法は簡単なものなので、言葉を使わなくても十分扱  
える。

魔法を使用した結果、アリアの手の上には水が玉のような形で浮かんでいる。

それを見ただけでセリナは興奮している。

「こっからが本番ね！」

アリアは続けて風魔法を使い、水の玉を霧状にする。

キラキラと舞う水の粒は夕日の光を受けて、とても綺麗だった。

「…すごい、綺麗」

セリナはその光景に見入っていた。

「うん、綺麗だねー。綺麗なんだけど…」

『…本当は虹を作れたかったんだけどなあ…』

とアリアは納得しない様子で、

『あとで何がいけなかったか、調べよう』

と心にメモをするのだった。

しばらくして、母さんが迎えにきた。

他の食材も持っていたので、遊んでいるうちに買い物を買わせてたらしい。

「アリアちゃん、そろそろ帰りましょうか」

「はい。それじゃセリナちゃん、またねー」

「うん！また遊びに来てね！」

簡単な挨拶を交わし、アリアは母さんと家に帰るのだった。

### 3話 6歳 夢の中での出会い

僕は今、夢を見ている。

夢だということは分かるが、なんだか意識がはっきりしない。

近くに何かがいる気配を感じるけれども、何も考えることができない。

「……………」

その『何か』が僕に語りかけているのか、ずっと僕のことを見ている。

「……………」

いつ終わるか分からない夢の中で、その『何か』は変わらず側にいて、

こちらを見ている。

なんだろう、だんだんと元気が無くなってきたように思えるのは僕の気のせいだろうか？

姿ははっきり見えないし、何を言っているのか理解することもできないのに…

その『何か』が悲しい思いをしていることを、心で感じる事ができていた。

だから、

「かな…しまない…で…」

と、

薄れる意識の中、『悲しまないで』と、一言だけ、一言だけだけれども、

自分の伝えたいことを、言葉にすることができた。

朝目覚めて、

『不思議な夢だったなあ…………』

程度に夢の事を思い、いつものように朝の鍛錬へと向かった。

#### 4話 6歳 さらに上を目指して

「おはよう、父さん」

「ああ、おはよう。さて、今日は何をしようかね」

毎日の鍛錬で、アリアの魔法を使う技術は格段に成長していた。

それは、稀有な才能もあったが、努力したからというのも大きかった。

まだ荒さは残るものの、両親が教えられることは一通り習得している。

「んー、父さんみたいに中級魔法をもっと上手に使えるようになりたいんだけど…」

中級魔法は使える、けれども威力も効果もまだまだ未熟で、不満を持っていた。

一般的に、魔法補助具なしで中級魔法を扱えるようになるまでには、20年ほど年月が必要だと言われており、

それを6歳で習得したアリアは周りから見れば異常なのだが、

両親は出生時の事もあり、納得できていた。

「そうか。ならば一度、補助具を使って感覚をつかんでみるか？」

補助具とは、魔法を使用するとき、術者にかかる負担を軽くし、

術者自身の魔法力を一時的に増幅させる働きがあるため、

素の力より強い魔法を扱うことができるようになるモノのことを言う。

また、補助具は希少で高価な物が多く、所有している人は少ない。

「補助具は使わない。僕の手だけでなんとかしたいから」

「まあ、そう言うと思ってたけどな」

ハハツと笑い、アリアの頭に手を置く。

「いいかアリア。人には得意、不得意としている系統があることは知っているな？父さんが見る限りだが、アリアはまだ中級魔法を中級魔法の威力相当に当てはめて発動できていないから、違和感を感じ



じ、上手く扱えていないと悩んでいるんだと思う」

「父さん、それってどういうこと？」

「アリアは風系統が得意だよ。得意な風系統で中級魔法を普通に扱えるレベルということは、風系統以外だと、中級魔法を扱うにはちよつと時期が早いと考えることができるよね」

「ああ！そうだったのか！それじゃあ、他の系統の練習をもっとすればいいんだ！」

補助具に頼る。諦める。という選択肢は無かったようだ。

「そういうことになるね。うーむ、しかし困ったなあ。これ以上、父さんたちでは効果的な鍛錬の方法が思い浮かばないぞ」

「？いつも通りの練習をすればいいんじゃないの？」

「アリアは十分すぎるくらい基礎をこなし、身につけることもできたから、もう今までの方法では得られるものが少なくなる頃だと思うんだ」

「そっかあ。んー、どうしよう…」

父さんを真似て腕を組み、考えるポーズ。

父さんは笑いながら

「アリアが本気で魔術を習いたいと言うならば…町にいる父さんの先生に指導を頼んでみようか？」

「先生？」

「そう、父さんが学生の時にお世話になった人だよ」

「怖くない？」

興味はあるが、知らない大人の人ということで、少し腰が引けている。

「…今はもう怖くないよ。とても優しいおじいちゃんさ」  
アリアはどうしようか悩みに、悩んで

「父さん、先生に魔法を教わってみたいです」  
と答えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0290z/>

---

気分屋魔術師 [幼少期編]

2011年12月4日02時52分発行